

デンマークの高齢者福祉と住宅

第17回



北欧の視察を始めて20年。40回目の視察となった今回は、デンマーク・オールボー市を訪ねた。

病院入院期間短縮で在宅介護を充実

デンマークでは10年前から実施してきた福祉テクノロジーの導入が、高齢者福祉のコスト削減に効果があると判断し、さらなるステップアップに動き出した。無料で提供している医療や介護サービスの質を落とさず、限られた予算内で実行するための改革を県や市とともにやっている。その最先端に行くオールボー市を視察した。

県では病院のベッド数を25%削減し、手術に特化したスーパーホスピタルに変革して平均入院日数の短縮をめざしている。市では早期退院に対応すべく、在宅で高度な医療に対応する訪問看護や専門性の高い介護職員を養成して、プライエボリー（介護住宅）や自宅への復帰がスムーズに実施できるような対策を講じてきた。プライエボリーでのホームドクターの駐在もその一つだ。また最先端の補助器具の開発と積極的な活用で“セルフヘルプ”を推進している。

ヨーロッパでいちばん幸せな街に選ばれたオールボー市は、人口21万人のデンマーク第3の都市だ。65歳以上人口割合が2014年の28%から2040年には43%に達するとの予測から、危機感を強めた市は、「市民は可能な限り自立した生活ができるよう、市民ネットワークづくりと対話を行う」というミッションを定め、具体策として「先駆的ウェルフェアを提供する」というビジョンを掲げて市民参加型の改革に取り組んでいる。実施にあたっては、以下の4つの明確な戦略を立て、その実効をめざしている。

1. 福祉改革ウェルフェア イノベーションで自立した生活を支える
2. 高齢化に対応した新しい福祉をつくる市民参加型の行政
3. エネルギーシユな行政組織…素早い対応で緊急時には現場で判断し行動する
4. リハビリテーション…補助器具を積極的に活用し自身でできることの範囲を拡大

市の高齢化対策の姿勢が明確になり、市民を上げての取り組みの成果がみえてきた。

高齢者住宅入居対象は認知症高齢者に

プライエボリーのひとつ、「スキッパークレメント」

は、認知症の高齢者を対象とし、1ユニット12人×3ユニットと、緊急利用者用ショートステイの1ユニットで構成され、明かりの使い方や壁の色は、認知症の高齢者の生活しやすさを意識した設えになっている。3年前に市内のすべてのプライエボリーの居室には天井走行リフトが設置されたので、移動も簡単に利用者にやさしい。居室は個室で水回り設備のある1LDKタイプ。

新しいタイプの認知症専用のプライエボリー、「トーンホイヘーヴ」も6月に完成する。1ユニット6人×12ユニット。ユニットごとに「自然」をテーマにした空間づくりをしている。各ユニットは「通り」に面し、町の住まいの一角を思わせる配置で、通りにはボランティアが運営するカフェやリサイクルショップ、日用品店も開店し、入居者は買い物も自由にできる。もちろん居室は住宅としての機能を備えた45㎡。

施設であったプライエム（日本の特別養護老人ホームに相当）を廃止して、住宅であるプライエボリーに国の方針を変えて31年。認知症高齢者の住まいの場に新たな先駆的モデルが登場した。

先進的補助器具開発にも注力

オールボー市が5年前に開設したウェルフェアテクノロジーセンターは、国にその効果が認められ、全国4カ所に規模を拡大したセンターが開設された。ここでは先端技術を駆使した補助器具の開発面で民間企業をサポートし、展示をとおして流通を手助けしている。ていねいな説明を行っており、利用者は新商品の補助器具を体験し、利用にもつなげられる。

日本の介護保険制度をそのまま維持できるか、将来展望は必ずしも楽観視できない。デンマーク・オールボー市の取り組みは示唆に富み、日本の参考になる。

	Name	田村 明孝
		たむら・あきたか
Profile	タムラプランニング&オペレーティング代表。有料老人ホームなどの開設コンサルティングのほか、全国の高齢者施設、介護保険居宅サービス、自治体の介護保険事業計画のデータベースの収集・販売などを手がける。高齢者住宅連絡協議会総監督。	